

わたしはママねえさん

■地震で父母を失った幼い四人の姉弟

木暮正夫・著／細川禪規・解説

世界の子どもノンフィクション 13





<著者> 木^こ暮^{ぐれ}正^{まさ}夫^お

1939年，群馬県に生まれる。日本児童文学者協会会員。著書は「ドブネズミ色の街」（理論社）「時計は生きていた」（偕成社）「海にはあしたがある」（牧書店）のほか，伝記，ノンフィクションなど多数。

N. D. C. 916 偕成社 1972 186p. 23cm.

©木暮正夫 1972

世界の
こども ノンフィクション<13> わたしはママねえさん

発行 昭和 47 年 6
著者 木 暮 正 夫
発行者 今 村 広
本文印刷 新興印刷製本株式会社
多色印刷 小宮山印刷株式会社
製本 文勇堂製本工業株式会社

発行所 株式会社 偕^{かい}成^{せい}社^{しゃ}

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5

振替 東京 1352 番
電話 東京(260)3221(代)

◇落丁本・乱丁本はおとりかえします◇

8395—507130—0904



ん
ふ
ぼ
う
し
な
に
ん
お
き
な
き
ょう
だ
い

展で父母を失った四人の幼い姉弟

たしはママねえさん



世界のこともノンフィクション 13

木暮正夫著・細川禪規解説



しずこさんはママねえさんしめぞうを取材はうどくじんにきた報道陣はうどくじんになやまされました。



けんきにくらす四人きょうだい。(左から、和人くん、量子ちゃん、静子さん、進くん)



①地震でなくなった両親のおそうしきで。
川村静子さんと弟の和人くん。②山くずれ
でつぶれた家。③妹の量子ちゃんとせんた
く。④妹や弟に本をよんであげる静子さん。



はじめに

木暮正夫

一九六八年五月十六日、東日本を大きな地震がおそいました。北海道と東北地方の各地に、地すべりや山つなみをひきおこし、多くのぎせい者をだした《一九六八年十勝沖地震》です。この物語の主人公、川村静子さんは、十勝沖地震でもことに被害のひどかつた、青森県の五戸町で、両親を地震でうばわれたのです。

静子さんは、当時、小学校五年生になったばかりでした。三年生の妹と、一年生の弟、三才の弟の三人をかかえて、静子さんはその日からへまねえさんになりました。

学校と家庭生活を両立させるための、さまざまな障害やなやみに、静子さんはうちひしがれることなく、たちむかっていきました。静子さんのひたむきながんばりと、静子さんにさしのべられた、あたたかい手。

ぼくはいままで三ど、五戸町に静子さんをたずねました。ちかちかをよせあって生きる、きょうだい愛にみちた生活にふれ、その感動をみなさんにつたえようと、ペンをとりました。





● も く じ

悪魔のつめあと

みじかい秋 10

おかあさんにかわって 17

小さいリンゴの木 24

やさしかったおとうさん 32

強震の町五戸

ゆれうごく大地 37

山が走った！ 44

なががらにすがって 51

マグニチュード七・八 60

あたしがおかあさんになる



ねむれない一夜……………69

おしかける報道陣……………77

はなれるのはいや……………85

教室のなかまたち……………94

かんばれ静子ちゃん

幸ノ神まいり……………104

宙づりのレール……………109

げきれいの手紙……………117

根津のおじさん……………124

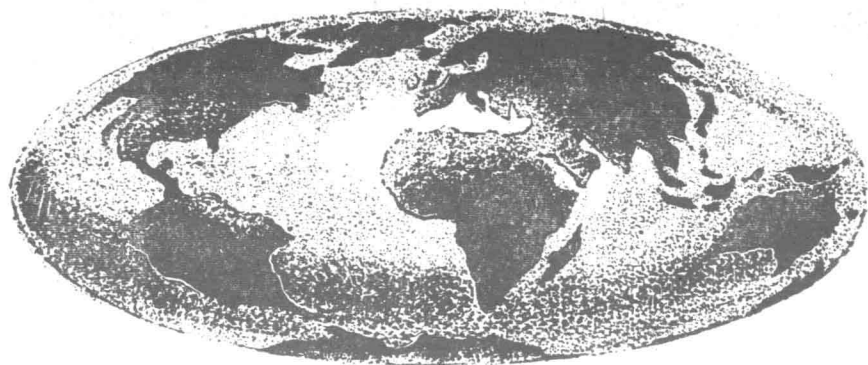
泥まみれのゆうれい

さがった成績……………131

いそがしい夏休み……………138

おとうさんのゆうれい……………146

花たばをささげて……………153



あしたにむかって生きる

卒業式をまえに 160

春のいふき 167

たんじょう日のつどい 172

たくましくはばたこう 177

●十勝沖地震と川村静子(解説)..... 182
とちあおきじしん かむむらしずこ かいせつ
川村静子後見監督人 細川禪規

さし絵／武部本一郎

写真提供／五戸町役場

デーリー東北社

東奥日報社

サンケイ新聞社

株式会社小学館

株式会社集英社

株式会社学習研究社

日本放送協会

わたしはママねえさん

■木暮正夫 著

■細川禅規 解説

世界のこどもノンフィクション <13>



悪魔のつめあと



みじかい秋



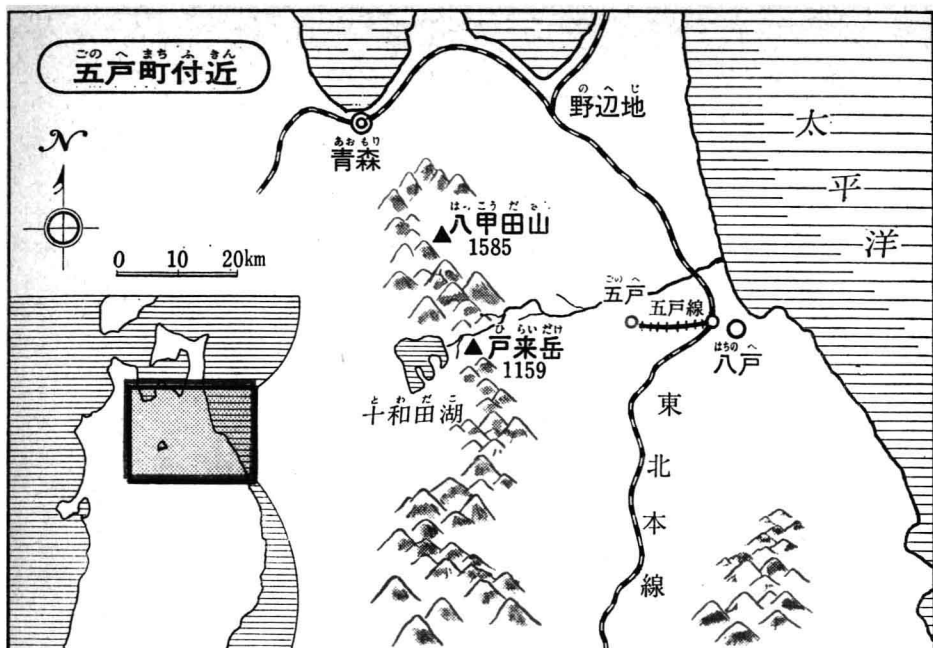
かりいれのおわったたんぽに、つめたい風がふくようになりました。冬が、いそぎ足でや
つてこようとしています。つめたい風は、もう秋がおわったことをつげる、季節の足音なの
です。

八甲田山群の峰みねをこえ、戸来岳の山頂をかくくだって野づらにふく風は、まもなくお
とずれる、きびしい冬將軍のまえぶれでした。

「さむいなあ……。」

ぼくが思わず口になると、

「いまからこんなに風こがひやこい（つめたい）じゃ、ことしの冬もきつと、しばれがゆるく



ねえだべな。まだまだこれくらいの風かじえに、さむいなんていつてられねえだ。」

ぼくといっしょにあるかわむらしすこにいる川村静子さんがつぶやくようにいいました。きびしいひえこみのことを、ここのあたりでは、しばれるしば、といひます。ゆるくないゆる、というのは、たいへんということことです。

町まちはずれのたんぼのなかを、一本道いっぽんみちがまっすぐ、北きたにのびています。ゆくてには、こんもりとした林はやしがひろがっていました。夕ゆふぐれのせませまっているこの道みちを、静子しずこさんは家いえにむかつて、ずんずんあるいていきます。

家いえには、ふたつ年下とししたの量子かずこちゃんと、おさないふたりの弟おとうとがまっています。量子かずこちゃんは六年生ねんせいになっていました。和人かすこくんが四年生ねんせい、すえの

弟^{おとうと}の進^{すす}くんも、一^{ねんせい}年生です。みんな大^{おお}きくなりました。四^{にん}人とも学^{がっこう}校にいつているのです。
月^{つき}日のたつのは、なん^{はや}と早^{はや}いものでしょう。

ぼくがはじめて静^{しずこ}子さんにあつたのは、三^{ねんはん}年半まえました。小^{しょうがっこう}学^{がっこう}校五^{ねんせい}年生だつた静^{しずこ}子さん
が、いまでは足^{あし}のすらつとのびた、中^{ちゅうがく}学^{がく}二^{ねんせい}年生になつています。

(静^{しずこ}子さん^{ちゅうがくせい}が中^{ちゅうがく}学^{がく}生になつてから、一^{ねんはん}年半ばかりあわないうちに、大^{おお}きくなつたものだ。
すつかり成^{せい}長^{ちやう}している。身^{しん}長^{ちやう}は、一^{いち}六^{じゅう}〇^{まる}セ^{せい}ンチちかいな。ぼくとそれほどちがいがな……。)



moto, T

静子さんの成長ぶりに、ぼくはかんしんしました。けれど、大きくのびたのは、身長だけでしょうか。いいえ、心はそれ以上に成長しているはずです。不幸をはねかえして、がんばりつづけたこの三年間、静子さんの心は、たくましい成長をとげているでしょう。ぼくは静子さん、量子ちゃん、和人くん、進くんの四人きょうだいの成長ぶりを見とくするため、東京からやってきました。静子さんたちにあうため、ここ、青森県五戸町にきたのは、これで三回めです。

静子さんといっしょにあるくぼくの足は、ともすればおくれがちでした。都会にいて、あらくことのすくないぼくと違って、静子さんは毎日、五戸中学校まで、かた道六キロ、ゆきかえり十二キロの道のりを、自転車もつかわずにかよっているのです。しぜん、足のつよさがちがいます。

「はやすぎますか？」

青い通学コートの静子さんが、ぼくのほうをふりかえっていいました。あどけなさののこっている静子さんの目が、

（おとなのくせに、だらしがないわよ。）

といたそうに、わらっていました。

ぼくは学校からずっと、静子さんといっしょです。静子さんはクラブ活動をおえたあと、町の商店街で買いものをして、いつもよりおそくなりました。これから、家につくとすぐ、夕ごはんのしたくを、はじめなければならぬのです。のんびりとあるいては、いられないのでしよう。

「いや、べつに……。しっかりあるくよ。和人くんたち、きみのかえりを首をのばしてまっているんだらうから。それにしても、さすがに青森県。さむさがかけ足でやってくる。」きのうの東京は、さわやかな秋晴れの日で、とてもあたたかでした。ぼくはまさか、気温がこれほどちがうとは思わず、うす着でかけてきたのです。半オーバーがほしいと思いました。

西の空はあかね空にそまっています。山や木立ちや町の家いえが、シルエットになつてうかびあがっていました。あしたも晴天をやくそくしている夕やけが、静子さんの血色のいいほおを、いっそう赤くしています。

十月もおわりにちかづいていました。八甲田山には、五日ほどまえに初雪がありました。



川村静子さんがママねえさんになったのは、小学校5年生のときでした

きょうも北の山には、雪がちらついているのかもかもしれません。ゆるやかな風ですが、からだのしんにさしこんでくるような、するどさがありました。

この風がピューピューと音をたててふくと、大地もこごえる、本格的な冬になるのです。

「春までの半年がたいへんだ。どか雪もあるし、吹雪もあるし、シベリア直輸入の風がほえるし……。おそい春、みじかい夏とみじかい秋。ここはほんとうに、冬ばかりながいんです。」

家で妹や弟とはなすとき、学校で友だちとなごやかにはなしたり、ときにはけんかを

するとき、静子さんは土地のことば、

いわゆる東北弁をつかいますが、ぼくには標準語にちかいことばでしゃべってくれます。

ついこのあいだまで、十和田湖の湖水のようにすみきった青空をとんでいた赤ダンブリ(赤トンボ)も、見られなくなりました。野ギクも、オミ